

# 令和5年8月教育委員会定例会 議事録

日時 令和5年8月17日(木)

場所 県庁行政棟7階「教育委員会室」

令和5年8月教育委員会定例会 議事録

開催日時	令和5年8月17日（木） 14時00分
開催場所	長崎県庁行政棟 教育委員会室
出席委員	中崎教育長、廣田委員、森委員、伊東委員、嶋崎委員、芹野委員
出席職員	狩野教育次長、桑宮教育次長、岡野義務教育課長、谷口義務教育課人事管理監、田川高校教育課長、直塚高校教育課企画監、加藤生涯学習課長
開 会	<p>(中崎教育長)</p> <p>それでは、ただいまから8月定例会を開会いたします。皆様にご報告いたします規則により、岩永理沙様ほか9名の傍聴を許可いたしました。傍聴人にあつては、発言はもちろん私語・談笑・拍手等も禁止されていますので、よろしく願いいたします。</p> <p>それでは本日の議事録署名委員私から指名させていただきます。議事録署名委員は嶋崎、芹野委員の両委員をお願いいたします。次に7月定例会の議事録は各委員に送付されておりますが、承認してよろしいでしょうか。</p> <p>「異議なし」と呼ぶ者あり</p>
前回会議録承認	<p>(中崎教育長)</p> <p>ありがとうございます。ご異議ないということですので、前回の議事録は承認することにいたします。それでは、各委員ご署名をお願いいたします。</p> <p>本日、提案されている議題等のうち、冊子2につきましては、教育委員会の会議の非公開に関する運用規程により非公開として協議を行いたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。</p> <p>「異議なし」と呼ぶ者あり</p>
報告（1）	<p>(中崎教育長)</p> <p>ご異議ないようでございますので、そのように進めていきます。それではまず報告事項1について説明をお願いいたします。</p>

質 疑	<p>(岡野義務教育課長)</p> <p>それでは、報告事項1「教職の魅力化作戦会議」についてご説明をいたします。冊子1の1ページをお開きください。本会議の設置目的を1に示しております。教員採用倍率が低迷し、教員のなり手不足が深刻化する中、教職員の働き方を見直し、働きがいを高めていくとともに、本来の教職の魅力、やりがいを積極的に発信し、教職に対するイメージアップを図ることを目的として、本会議を設置いたしました。本会議の委員の皆さんは、2の一覧表に示した、12名の皆さんです。民間、有識者、PTA、行政、学校、それぞれの分野においてご活躍の皆様にご委員を委嘱いたしました。4に示しておりますとおり、芹野教育委員様にもお力添えをいただいているところです。この12名の皆さんの協議を取りまとめる座長としての役割を中崎教育長が担うという形で、今回実施することとしております。第1回目の魅力化作戦会議を、4の項目に示しておりますとおり、令和5年7月28日金曜日にこの場所で開催をしたところです。協議のテーマとして、主に3つの視点を設定いたしました。1つ目は、これまでの学校の働き方、文化、こういったものを変えるためにはどうしたらいいのかという視点。2つ目には、学校を地域や保護者の理解で支えていくという時にはどうしたらいいんだろうかという視点。3つ目は、採用試験であるとか、人的配置であるとか、教育施策がいかにあるべきか、という3つの視点で、話し合いを持ったところです。冊子の2ページに、協議の中で出た主な意見を箇条書きしております。実に様々な角度から数多くの貴重なご意見をいただくことができました。予定しておりました、1時間半という時間が本当にあつという間に経過した、非常に中身の濃い充実した会議になったものと考えているところです。5の今後のスケジュールに示しておりますとおり、第2回の魅力化作戦会議を9月末から10月上旬の期間の中で設定したいと考えているところです。第1回開催の協議内容をさらに深化、発展させつつ、今後の我々教育委員会の取り組みや、予算立ての方向性や、そういったものを探りたいと考えているところでございます。以上簡単でありますけれども、報告とさせていただきます。よろしく申し上げます。</p> <p>(中崎教育長)</p> <p>ただいまの報告に対して、ご質問、ご意見等ございませんでしょうか。</p>
-----	--

(廣田委員)

教職の魅力化作戦会議というこのタイトルが非常にいいなと思いました。というのは、教員のなり手不足が深刻化しているというのは、長崎県が去年は小学校が1.2倍で、今までだったら本当に考えられなかったような低倍率になっていて、受けた人がほとんど入るような試験の状況になっているので、はたして本当にこれでいいのかなと私は思っています。そして長崎県は確かに人口減少という大きな問題もありますが、この前の教育委員会の会議でも愕然としたのは、小中学生の学力が全国の学力状況と比べて、悪い方に、低い方に乖離してきている状況があって、こういうところがやはり、志願倍率が低下していることも影響しているんじゃないか。はっきり言うと、教員志願者の減によって、現在の学校の教員の資質が低下しているのではないかという懸念をちょっと持っているんですよ。そういう意味で、教職の魅力化作戦会議っていうのは非常にいい名称だと思うんだけど、一番大事なことは、本当に2回だけの会議で終わるんじゃなくて、本当に魅力化するにはどうしたらいいのかということを考えていかないといけないと思うんですよ。この前国の説明を聞いたときに、学生の教員志願者の倍率は増えてきているんだとおっしゃっていましたが、長崎県の現状はどうなのかを教えてください。要は若い教員が増えてくればいいんですよ、現職の大学生が志願してくれればいい。そういう状況にあるのかどうか。今退職者がどんどん増えているから、そういう意味で倍率が下がってきていると僕は受けとめているんですけども、そういった状況をちょっと教えてください。

(岡野義務教育課長)

大学の新規卒業の教員採用の志願者ということで、比べてみたいと思います。これは本県においても増加傾向にあることは間違いございません。直近5年間で調べてみますと、今回令和6年度採用の新規卒業志願者が488名でした。これがつい最近行われた教員採用試験の出願状況です。2年前の令和4年度は、434名でした。ですのでそこから比べても50名増えております。さらに2年さかのぼって、今から4年前の令和2年度と比べますと、この時が381名ですので、4年前からすれば100名増、2年前からしても50名増ということで、大学の新規卒業者の出願は間違いなく増えているというところで確認をさせていただきたいと思います。

(廣田委員)

次のページにそのときの会議での意見がいろいろ出ているだけ

ど、今課長の説明で、現役の大学生からの志願が増えているという状況なので決して長崎県の場合は、悪い方向には向いてないと思います。若い人たちが教職を志願してくれているというのは非常にありがたいことだと思うので、そういう意味ではいいと思うんですが、大学生が4年生で長崎大学の場合だったら附属中学校に行って、たしか1ヶ月ぐらいの現場の実習、インターンみたいなことをやって、そしてすぐ教職についていくという状況だったろうと僕は思っているんですけど、この状況は変わってないんでしょうか。

(岡野義務教育課長)

長崎大学附属小学校及び附属中学校、特別支援学校、こういったところで行われている実習について調べてみましたが、例えば中学校の何かの教科を第1として、主たる免許として考えている学生さん、長崎大学の教育学部の中学校コースで学ばれている学生さんは、主たる免許は例えば中学校の国語とか中学校の社会とかなりますけれども、この主たる免許の教育実習は、大学3年生の9月で行っております。参考までに、今長崎大学の教育学部は2つの免許を持つことが義務づけられております。中学校の免許を持った人は高校の免許も一緒に持つとか、小学校の免許だけではなくて中学校の免許とか、小学校の免許と幼稚園の免許とか、2枚の免許を持つことが必要とされていて、この2枚目の免許のことを大学側は副免と言っております。主免の実習が3年生の9月であるのに対して、副免は大学4年生の10月にされており、これはおそらく教員採用試験がすべて終わった後に、副免の実施をするという配慮のもとでなされていると考えております。

(廣田委員)

教職の魅力というものを本当に知ってもらうためには、一般の企業がやっているようにインターン制度みたいなものをもうちよっと充実させていかないと、小中学校や高校の実態っていうのはわかってもらえないんじゃないかと思います。ただ厳しい面だけを教育実習で学んで、本当の魅力というのか、教職のやりがいとか、高校生を教えるいくと人生を左右する場面に立ち会うようなときもあるので、そういった経験を先生方の手伝いをしながら学んでいくみたいな、長崎県らしいインターン制度、他の県にないようなインターン制度を取り入れていけば、もう少し教職の魅力化っていうのが上がっていくのではないかなというのが1点です。

もう1つは、「内外教育」に千葉県が高等学校に教育基礎コースというものを設けたっていうのが8月4日号に載っていました。千葉県

は4つの高校に教育基礎コースというものを置いていて、それは千葉大学と連携して、そして夏休みとか冬休みとかに集中講義をして、その単位を取らせていくというコースで、そうやって教師のなり手不足などに対応しているという記事がありました。以前そういう話を聞いて、この定例会の場でも少し話をしたことがあると思いますが、そういうところで非常に倍率が上がっていて、それまで定員不足だったのが、十分に定員を確保できたということがあったようです。これは報告事項2で話すべきだったかもしれませんが、例えば島原高校や諫早高校は、昔から優秀な先生方を輩出していて、学校の先生になりたいという子どもたちが結構多かったように思いますが、そういった高等学校に、佐世保でも、諫早でも島原でも長崎でもいいけども、そういう方針を作って、魅力化を高めていくというようなことも考えたらどうだろうか、大学生からと高校生からとやっていけば、もっと教職の魅力を知ってもらえるんじゃないかなと思いましたが、このことについてはどうでしょうか。

(田川高校教育課長)

先ほど廣田委員からご質問がありました、教育基礎コースが他県に設置されていることは私も承知をしているところです。大変勉強になりますのは、この教育基礎コースという設置のあり方が、おっしゃいました千葉県ですと、クラス独自のコースではなくて、それぞれ生徒たちは、文系のコース、理系のコース、あるいは英語のコース。その学校に設置されている当該コースに所属していきながら、週の1コマ、2コマだけそのコースの生徒が集まって、授業あるいは長期休業中の実習というような形で、独自の定員割れなどの心配がないようなコースのあり方というのは、大変勉強になるかなと覚えているところです。そういったところで、確かに島原高校ですとか諫早高校ですとか、従前から教職員の志願者、実際に卒業生が教師になっている数が非常に多いところがございますので、そういったところに設置をするといったことも、また1つの方法であろうかと思えますし、先ほど報告事項2のところというお話がございましたけれども、島原高校の方もずいぶん定員割れが大きくなっておりまして、そういった中で先日コンソーシアムを開催いたしまして、県または市、あるいは地域の方々、民間企業の方々、銀行の方々を含めまして、これからどんな探究活動ができるのかということも研究しております。島原高校においては、今後歴史探究やそういったアカデミックな学びを深めていくというような取り組みをやっていくということでございます。築城400年に合わせまして、県指定であるものを国指定にしていくので、そ

ういったところに高校生も絡めないかという話も出てきておりますので、そういった教員の志願コースだとか、あるいは設置しました探究科、そういったことも総合的に含めて学校の魅力化を図っていきたいと思っております。

(中崎教育長)

他にご意見等ございませんでしょうか。

(芹野委員)

私も出席させていただきましたので、感想も含めてお話させていただきます。1回目だったものですから、12名いらっしゃる委員さんもここで初めてお会いされたので、深く入る討議はなかなかし尽くせなかったのかなと感じました。その中で、この作戦会議、もしくはこの働きがい改革、ここに対する本気度と緊急性というものがどの程度あるのかということも委員の皆さんについてそれぞれで感じ方もまちまちだったかなと思うので、教育長の方でもう少し本気度や緊急性を引き上げて、今後どう議論していくのかというところは、少し我々の方にご指示いただいたほうがわかりやすいかなと思ったのが1つめです。

それとやはりこういったものを進めていくには、時間軸のあるロードマップみたいなものがないと、自分たちの議論がどこに向かって進んでいて、その中間地点に何があって、どういった課題があるのかというのがちょっとわかりにくいなという感じがしました。問題が多岐に、広くございますので、その辺りを少し2回目以降にお示しいただきながら、議論を集中させればもっとよりよい討論ができるのかなという感じがしましたので、意見として言わせていただきます。

(中崎教育長)

よろしいですかね。しっかり今の意見を参考にして、言いつばなしにならないような形で、しっかりロードマップを作りながら、緊急性については優先順位をつけながらやっていくと、実効性のある政策に結びつく感じがいたしますので、どうぞよろしく願います。他にごございませんでしょうか。

(森委員)

先ほど芹野委員もおっしゃいましたが、今後どうなっていくのかというか、どういう形で魅力化という部分が動いていくのかなというのが私もちょっとわかりづらかったところもあります。県内の現場で働

いてる先生たちの意見というのが、やっぱり一番重要なのではないかと思います。私たちも教育委員として関わらせていただいておりますが、やっぱり現場の大変さとか、どういうところにやりがいを感じるとか、そういうことはやはり細かく知りえない部分があるので、先生たちが自分たちで魅力を発信できるような環境を作ってあげることが、大事なのではないかと思ったのと、私は甥が埼玉の方で教員をやっている、部活動も受け持っている毎晩会議が22時過ぎらしいです。ただ、そのことを話した時に、大変だけどやりがいはあるし、自分が好きなことだから、遅くなるということが問題じゃなくて、自分は遅くなってもそこにやりがいを感じているから、楽しく仕事している、という話を聞いたことがありまして、だから残業をということではないんですけど、働いている先生たちがいかにしてやりがいを持てるような環境を私たちがサポートできるか、私たちができることというところ、やっぱりそういうところになってくるのかなと思います。周りから固めていっても、先生たちに受け入れられないような施策であれば、結局形になっていないものになるので、現場の先生たちにしっかり還元できるというか、先生たちも頑張ろうとか、そういうふうに発信したいと思えるようなものに繋がればいいなとこれを読みながら思いました。すみません、感想です。

(中崎教育長)

他にございませんでしょうか。先ほど2回で終わりかということでしたが、1年で終わるようなものではないと思っておりまして、今後も展開していきたいと思っておりますし。これは今県の単独事業でございますけれども、教職員の魅力、教員のなり手不足というのは全国的な課題になっておりまして、国の方もいろいろな情報発信であるとか、働き方改革であるとかそういった県教委の取り組みに予算をつけるような動きもあっております。ただそれを教育委員会だけの取り組みでやるのではなくて、大学とか民間が入ったコンソーシアムが組み立てた事業に支援するような動きもあっておりますので、もしそういった動きが出てくれば、しっかり国の予算も取り込みながらいろいろな施策が展開できるような作戦会議になればいいなと思っておりまして、しっかり皆様のご意見も踏まえながら、進めていきたいなと思っております。

報告 ( 2 )

それでは、報告事項2について説明をお願いいたします。

(直塚高校教育課企画監)

資料3ページの報告事項(2)、令和6年度公立高等学校、進学希



望調査状況調査第1回の結果につきましてご説明をいたします。この結果につきましては、去る7月18日に公表させていただいております。「1 調査目的」は記載のとおりでございますが、本調査につきましては7月1日と、11月1日の年2回実施をすることとしております。「3 調査対象者数」につきましては、昨年と比較しまして79人多い、12,064人となっております。「4 調査結果」でございますが、「(1) 進学希望者数」につきましては、11,727人で、「(2) 進学希望率」につきましては、97.2%となっております。なお、未定者が全体の2.5%にあたる297人いますので、11月調査では進学希望率はもう少し上がるものと考えております。

「(3) 課程別進学希望倍率」につきましては記載のとおりでございますが、全日制課程が0.93倍で昨年より0.01ポイント減となりまして、令和2年7月調査から4年連続して、1倍を割る結果となっております。

資料のページ飛びまして、6ページの参考をご覧ください。全日制の公立高校の志願者につきましては、89人減少となっております。表の一番下の方に記載のとおり、令和5年7月と令和元年7月を比較しますと、①中学卒業生数は202人減少しております。進学希望者につきましては、②県内の全日制希望者は580人減少に対し、③県内の定時制希望者は27人増加、④県内の通信制希望者は98人増加、⑤県外高校希望者は94人増加となっております。令和2年度からの私立高校の授業料実質無償化等の影響もございまして、早い段階から私立高校を第1希望とする生徒が増えていることに加え、多様な学びを選択し、定時制や通信制の高校を希望する生徒が増えている傾向がございます。また昨年度と比較しまして、県外の高校を希望する生徒も増えている状況でございます。

ページ戻りまして4ページをご覧ください。希望率が高い学科・学校・普通科ごとに記載をしております。昨年の結果から順位の入替えはあるものの、例年と同様に、工業高校の機械科や建築科、情報技術科、また商業高校の情報科、諫早農業高校の動物科学科などが、希望倍率が高い状況となっております。

5ページをご覧ください。令和4年度、5年度に新たに学科を設置した6校の希望状況でございます。まず松浦高校の地域科学科につきましては、昨年度より3人希望者が増加しているものの、以前から佐世保市や隣接する伊万里市へ進学する生徒が一定数おりまして、新しい普通科としての地域科学科の取り組みが浸透し、さらなる希望者の増加に繋がるには一定の時間を要するものと考えております。地域科学科におきましては、一昨年度から進学にも対応している学科である

<p>質 疑</p>	<p>ことを説明会やメディアを通してアピールをしております。またさらなる学びの充実を図るために、国の委託事業を受けまして、その事業の中でコーディネーターを雇用し、地域と学校をつなぐ役割を担っていただいております。このコーディネーターが中学校に対して生徒募集活動や、情報交換を積極的に行っていただいておりますので、引き続き周知広報活動を強化していきたいと考えております。文理探究科に関しましては、猶興館高校を除く4校では、昨年度の7月と比べると希望者が増加しております。学校の特徴であります「探究的な学び」の重要性について、一定受験生や保護者に浸透してきたのではないかと考えております。県教委の広報活動としましては、8月にラジオや県の情報番組、9月以降に広報誌などの媒体を活用して周知を図り、文理探究科の希望者の増につなげていくこととしております。</p> <p>個々の高校の状況につきましては別添資料をご覧ください。主として離島半島部の高校が定員を下回る希望者数となっておりますが、今年度から離島半島を中心に、先ほど田川課長からも説明がありましたが、新規事業として地元の市町を中心に地域と一体となって、高校の魅力化と地域の活性化を目指す、高校・地域連携イキイキ活性化事業に取り組んでおりまして、現時点では島原市で先日8月8日、新上五島町では今月の30日にそれぞれコンソーシアムを立ち上げて、具体的な取り組みの内容について協議を進めていくこととしております。その他の地域におきましても随時この事業を活用しながら、高校の魅力化に取り組むこととしております。</p> <p>ちなみに今回の結果につきましては7月1日を基準日としておりますが、中学校によっては5月、6月頃に調査をされた数値でもございますので、中学校での三者面談や、高校のオープンスクール、学校説明会等を踏まえた進学希望調査の結果とはなっておりません。そのため次回の進学希望調査では、若干の変動があるものと考えております。ただ、第1回希望調査におきまして、全日制課程で4年連続して希望者が定員に達していないということにつきましては、極めて厳しい状況であると認識をしております。11月に実施する第2回目の調査に向けまして、学校と一緒に広報活動に取り組んで、希望者数の増を図って参りたいと考えております。簡単でございますが、以上で説明を終わります。</p> <p>(中崎教育長)</p> <p>ただいまの報告につきましてご質問等ございませんでしょうか。</p> <p>(廣田委員)</p>
------------	--

先ほど申し上げましたように、5ページの島原あるいは猶興館の文理探究コースについてですが、島原高校の場合文理探究はやっと定員を上回ったけれども、普通科に至っては55人も足りないということで、伝統ある島原高校がこういう状況ですよね。その辺に問題点があると思うし、猶興館に文理探究科を作っても、本当に人が集まらないという状況で、文理探究を作った意味があるのかという感じがします。ですから先ほど報告事項(1)で私が言ったように、千葉県が教育基礎コースを作っていて、このコースというのは学科じゃないから、入学してからそのコースに入れますよって設定で作っていいんですよ。ですから、もし僕が校長ならば、島原高校の普通科の中に教員基礎コースっていうのを作って、そこで大々的に将来学校の先生になりますよということで宣伝をしながら生徒を集めていくと思うんですよ。校長先生がコースなら簡単に作れるわけですから。そして文科省の検定教科書と違う教科書を使って、教育をしてもいいわけですから。なにかそういうものをやっていかないと、ただでさえ生徒は減ってきているのに、魅力のない学校を作ってもあんまり意味がない。ただ文理探究科をこれだけ同じような名前でいくら作ってもだめだと僕は何回も言ってきましたけれども。やっぱりそれぞれの学校で、特色ある学科を作るコースを作って生徒を集めないと、意味がないんじゃないかなという感じがするんですよ。ちょっと厳しい言い方ですけど。千葉県がどういうところでそのようなコースを作っているかという、内外教育によれば、社会の中で人材が不足してる部分に作っているということだそうですね。教育、保育、医療、福祉、そういうコースを普通科の中に千葉県は作っていくんだと。そうやって人材が不足しているから、その人材を満たすためにもそういう必要性があるわけですよ。そういうのを作っていないと、何かこう抽象的な文理探究科って作っても、生徒たちにはピンとこないんじゃないかという感じがする。ちょっと厳しい言い方ですけど。

(直塚高校教育課企画監)

廣田委員がおっしゃるとおり、今後は本県におきましても、普通科での特色をして打ち出していくという観点から、生徒の進路希望やニーズに応じて、大学での学びにつなげていくということが重要になってくると考えております。その中でも、今ご提案いただきました教員を目指すコースにつきましては、先ほどの報告事項1で義務教育課長からご説明がありましたけど、現在県教委を挙げて取り組んでいる教員の魅力アップの取り組みなどと連動させるなどしまして、今後の学科のあり方の一つとして検討していきたいというふうに思っております。

ます。

(中崎教育長)

他にございませんでしょうか。

(伊東委員)

今廣田委員がおっしゃられました文理探究科についてですが、昨年度からスタートして、おそらく私の記憶では昨年度は非常に倍率が低かった記憶があります。それから見ると、今年度は少し上がってきている傾向があつて、ようやく皆さん理解していただけてきているのかなつていう気がして、よかつたなと思つています。島原高校の話を先ほどされましたけども、普通科の方は倍率落ちて低いのに、文理探究科はちょっと、1.03倍と際どいところですけども、本来であると全体的に低かつたのかもしれないですけど、文理探究でこう上がってきて、それに対して何らかの戦略的なものが島原高校であつたのか、他の高校でもその文理探究科の倍率が上がってきているので、何らかの工夫とか戦略とかあつたのかどうか教えてください。

(直塚高校教育課企画監)

島原高校につきましては、昨年度文理探究科に限つた話ではないんですが、島原半島に8つの県立高校がございますが初めて合同で学校案内のチラシを作成して、中学1年生2年生を対象に実際に高校の先生方が役割分担をしながら、中学校に直接出向いて学校のPRを行つてきたところでございます。単にオープンスクールや学校説明会だけじゃなくて、こうした顔と顔を突き合わせて、高校の魅力を伝えるという努力というものをこれまで以上にやつていかなければいけないと考えておりますし、また中学生の早い段階から、そういう方向の魅力やその特色について伝えていくというような取り組みにつきましても、今後も引き続きやつていかなければいけないと考えているところです。

(伊東委員)

今言われた学校説明会は、島原ではじめられたとおっしゃられましたがそういうことは今までされてこられなかつたんでしょうか。

(直塚高校教育課企画監)

学校説明会やオープンスクールは当然これまでも行つてきていますが、島原半島の今回の取組は相手から来るのを受けるだけではなく

て、直接高校の先生方が中学に出向いて顔と顔をつき合わせるというPRは、今後もやっていく必要があると考えております。

(森委員)

可能かどうかはわからないんですけど、希望している子どもたちに、なぜこの学校を希望しようと思ったのかというアンケートをとってみると、例えば文理探究科を希望した子どもたちが、実際の説明会やオープンスクールでどういう部分に響いたのかといったことなど、情報を集めることができれば、そのアプローチの仕方、PRの仕方、もうひと工夫できるのではないかと率直に思いました。他の工業や、商業でもそうなんですけど、この科のどこに、例えば誰からの情報でとか、細かく聞くとすごく大変なんですけど、そういう生徒たちの本音というか、この学校を希望したきっかけは何だったかを聞く機会があると、学校がやっているオープンスクールが繋がっているのか、それとも別の部分で効果が出ているのかというのが見えてくるのかなと思いました。

(直塚高校教育課企画監)

まさしくそういった取り組みアンケート必要だと思います。今学校におきましても民間企業と一緒に、マーケティングというか、そういったアンケート分析というものは必要になってくると思いますので、アンケートの内容や実施時期について、学校と相談しながら検討して参りたいと思います。

(芹野委員)

この調査目的の中に適正な進路指導を図るためとなっていますけれども、適正というのはどういったものを目指されているのかちょっとわかりにくく、この調査だけだとどうしても数を追ってしまうので、なるべく倍率が平均化するようということにもとらえかねないんですけども、子どもたちにとってはそういう形ではないと思うので、ここの適正というのが何を指されているのかなというのが、1つ疑問があります。

もう1つおたずねしたいのは調査日が7月1日と言っても、3年生の7月1日だと、あと6ヶ月ぐらいしかないので、ちょっとその適正な進路指導をするには少し遅いのかなという気がするんですけども。これは例えば3年次に上がる時であるとか、2年次に前提となる1回目の調査があつて、これを2回目にするとか何か工夫が要るのではないかなと。これ以外にもいろいろな調査をされている

ので、総合的にということであればそれはそれでいいと思うんですけど、そのあたりちょっとお聞かせいただきたいと思います。

(直塚高校教育課企画監)

適正という言葉の使い方でございますが、少しこれは行政的な表現になっているところがあるかと思えます。三者面談はだいたい夏休みにやっております、確かにもっと前という話もあるかもしれませんが、実はこの調査は現在7月と11月にやっておりますが、令和2年度までは7月1日と、10月15日、12月1日の3回やっておりました。しかし集計や学校の負担等を考え、また10月15日と12月1日のアンケートの結果を比べたらあまり変動がありませんでした。7月から10月、12月は結構変動があるんですけど10月と12月はあまり変動がないということもございまして、令和3年度から7月と11月の2回の調査としております。早い時期の調査をというご指摘については学校でもいろんな意見を聞いて、早い段階で進路を決めている中学生がどのくらいいるのか、もうちょっとその辺のところもしっかりニーズなどを分析して、検討してまいりたいと思えます。

(嶋崎委員)

実業系の高校は学ぶべき内容が具体的なのでわかりやすいと思うんですが、文理探究科だとなかなかわかりづらいので、もう少し工夫を凝らして、プレゼンできるようになさったらいかがかなと思えます。

もう1つは進学希望状況を拝見していると、なかなか離島や半島が大変な状況に陥っていると思うんですけども、私立の場合であれば通学手段としてスクールバスとかができますが、例えば小浜高校なんかはおそらく徒歩あるいは自転車通学のエリアじゃないかなって思うんですね。簡単ではありませんけれども、そういう通学手段について県立高校でひとつ工夫をされたらどうかと思えます。とんでもない状況になってしまうという危惧をしております。

(直塚高校教育課企画監)

委員おっしゃるとおり、文理探究科という名称ではなかなかイメージが付きづらいと。もともとこれらは佐世保南高校以外、理数科としてあったものです。ただ中学の早い段階で理系を選択することがなかなか難しいということで、文理探究科という名称に変えたわけですが、今年度から文理探究科が始まっております例えば島原高校が

い先日7月末に長崎総合科学大学と連携しまして、この大学の工学部の船舶工学コースにおきまして、船舶海洋試験水槽での実験ですとか、医療工学コースでは医療機器を実際に操作するでありますとか、あと総合情報学部では、知能情報コースでのロボットの操作、あるいは生命環境工学コースでは植物油からバイオマス燃料を実際に作ってみる、などといった大学と連携した体験をやったところでございます。この模様は、今月末から9月頭に県の広報番組である「みじかなナガサキ」で取り上げられることになっております。そうした各高校におきまして、例えば長崎北陽台高校での、長崎外国語大学や長崎大学水産学部の連携や、佐世保南高校につきましては筑波宇宙センターの企業研修など、特徴のある大学・企業との連携を今まさに今年度から始めているところもございまして、そういった取り組みを中学生、もしくは保護者の皆さんにしっかりとPRできていけばもう少し文理探究科の取り組みを知っていただけるのかなというところでございます。

それから通学の支援、工夫でございまして、特に島原半島につきましては、小浜に限らず南島原の方も私立はスクールバスを出しておりますが、なかなかそこがネックになって、私立にどんどん人が出てきているという状況です。そこで通学費の支援をしようとするれば、莫大な予算がかかってしまうという状況です。委員おっしゃるとおり、そこは一番の課題であるとは思っておりますが、乗り合いタクシーのような低予算で何か通学支援ができる方法がないとか、県教委として検討や研究をしていかなければいけないと思っておりますが、現時点ではなかなか通学の支援に対するそういった課題を解決する糸口が見つかっていないという状況です。しかしそれで諦めるのではなく、高校の魅力を高めて遠くからでも来ていただけるように、まずはそこに注力して、県教委としては地域と一緒にあって、取り組んで参りたいと考えております。

(中崎教育長)

よろしいですかね。なかなか県が他市町からこの市町にというのはなかなか難しいので市町の方に主体でちょっと考えてもらいたいと思います。

(嶋崎委員)

それぞれの学校別にいくらコストがかかっているか、そういう視点も今後必要になってくると思います。これだけ希望者数が少ない学校もあるわけですから、そろそろそういうことを念頭に入れとかならないとい

けないような状況だと思います。

(中崎教育長)

今年度については若干中学3年生の15歳人口が増えているということで、学級数は変更しておりませんが、これからご存知のとおり急激に減っていきますので、ただ単に学級を減らすだけではなくて、高校というのは地域の中核でございますので、今いろいろ指摘あったような魅力、私学とは切磋琢磨して、公立高校は公立高校の魅力を引き上げていかないといけないと思っていますけれども、そうなることやっぱり出口が必要になってきますので、今からの時代に求められている探究的な学びであるとか、あるいは地域が求める産業人材の育成であるとか、先ほど説明がっておりますイキイキ活性化事業という民間も含めた地域と連携しながら、その地域の学びを作っていく、いわゆる子どもたちに必要な学びを作っていくというようなところを今進めておりますので、いろいろご意見いただいたような魅力化に向けて、今後とも取り組んでいきたいと思っております。

(伊東委員)

今出口のお話がちょっと出ましたけども、いろんな高校でこういうところに就職していますとか、こういう大学に進学していますとか、そういう情報をもちろん出されていますよね。

(直塚高校教育課企画監)

各学校におきましては進学や就職の実績というものは、出しております。

(伊東委員)

長崎工業がもう1人勝ちみたいな状況で、ちょっと中身を見ますと建築とかインテリアとかが増えていますよね。長崎大学の工学部でもそういう方面で女性が増えているというところがあって、私は中学校生の女子生徒がそういう進路に進んで、さらに倍率を上げてるのかなってちょっと思ったりもしたんですけどそういうところのデータはありますか。

(直塚高校教育課企画監)

工業高校は倍率高いんですが、特に機械科につきましてはその他の学科と比べて、企業からの求人が多いということが影響していると思っております。



報告（３）

また、確かに女子でも機械いじりが好きな子は多いかもしれないんですが、工業高校を志願する生徒の中には、やはり機械いじりに興味を持っている子が多いということで、現時点での進学希望調査におきましては、そういった生徒が機械科を希望するといった状況になっております。ちなみに工業高校におきましても、電子工学とか、工業化学といった学科につきましては、進学後どういった勉強をするのかなかなかわかりづらいということもございまして、少し倍率が低いという状況でございます。

（中崎教育長）

よろしいですかね。ありがとうございます。それでは報告事項（３）についてお願いします。

（加藤生涯学習課長）

冊子１の７ページをご覧ください。報告事項（３）になります。島で暮らす小学校５・６年生を対象とした、令和５年度しまのリーダーチャレンジ事業を８月１日から２泊３日で開催いたしました。このことについてご報告させていただきます。本年度は４０名の応募がありまして、資料の中ほどに表で示しておりますが、対馬市から１１名、壱岐市から１２名、五島市が１２名、小値賀町から４名、新上五島町から１名の合計４０名での実施となりました。今回の行程と主な活動の様子については、資料を１ページめくっていただきまして８ページ、９ページに掲載しております。炎天下の中、また台風の進路をにらみながらの実施でございましたが、例えば長崎スタジアムシティプロジェクトの建設現場を見学し、スタジアムが完成した姿をＶＲで視聴したり、長崎・武雄間の西九州新幹線の乗車体験をしたり、また、アジフライの聖地としてまちおこしに取り組む方々のお話を松浦魚市場で聞き、昼食にはアジフライ弁当をいただいたりするなど、参加した小学生に貴重な体験を届けることができたと考えております。

今回のプログラムの中で特に効果的であったのは、２日目の午後の長崎県立大学佐世保校地域創造学部の学生が準備してくださった、まちづくりのワークショップでした。まちおこしに実際に取り組む大学生の話に耳を傾けながら、島や長崎県の未来について語り合う小学生の姿が大変印象的でした。また、これまで他の島で暮らす友達との交流という経験がなかったようで、それぞれの島の話に耳を傾けながら、自分の島の魅力や自慢を伝え合う様子からも価値ある活動になっていると感じたところでございます。本事業は本年度から３か年で実施する事業です。今回は県北を中心に実施いたしましたが、今後は県

質  疑	<p>         央・県南での取り組みを進めて参りたいと考えております。なおこの体験活動メニューは、島は元より県内の小学生に体験させたい価値あるプログラムとして開発しているものでございます。今後は県内の学校や旅行者の方々はこのプログラムを提供して、今後の修学旅行や社会科見学などの体験活動の参考にしていただきたいと思いますと考えております。以上でございます。       </p> <p>         (中崎教育長)          ただいまの報告につきまして、ご質問ご意見等ございませんでしょうか。       </p> <p>         (廣田委員)          大変いい事業だと思いますが、参加児童数を見ると40名となっているんですが、例えば新上五島町が1人で小値賀町が4名で、少し人数に偏りがありますよね。一番多いのは五島市で12名になっていて、小学校6年生を見たら男子はたった1人しかいないとか、非常に偏りがあって、せっかくその島のリーダーを育てるといふのであれば、もう少しバランスをとって、特に小学校6年生の男の子1人っていうのはちょっと物足りないなという感じがするんですけど。40名という人数は、これは県が絞ったんですか、それとも希望者そのままの数ですか。       </p> <p>         (加藤生涯学習課長)          この40名という人数につきましては、最大40名という形で募集をさせていただきました。今回はたまたま40名の参加希望があり、希望した子どもたちは皆参加をしているという状況でございます。また地域的な偏りといましては、新上五島町につきましては、ちょうどこのときに、新上五島町において姉妹都市との交流という形で他のイベントが組まれておりまして、このことによって新上五島町からの参加が少なかったという状況でございます。この男女ごとの数につきましては、これも全く想定しておりませんでした。当然募集に関しても、男女の区別についての指定はしてないのですが、今回は女子児童が多かったという状況でございました。       </p> <p>         (廣田委員)          せっかくいい事業なので、予算の関係もあるんでしょうけど、40名で切らずにある程度柔軟性を持たせて、50名とか少し増えても参加させるとか、そういう余裕を持ってほしいです。それから1日目に       </p>
------------	---

郷土資料センターに行っていますが、せっかく見せるのであれば大村市の県立図書館を見せた方がいいのではないかとちょっと思ったんですけど。

(加藤生涯学習課長)

人員に関しましては、予算と検討を加えながら、今後考えていきたいと思っております。ミライo n図書館につきましては、ぜひ県央地区のメイン会場として、次のプランでは活用していきたいと考えております。

(嶋崎委員)

40名というのはバス1台分ということだと思います。この事業についてですが、対象を平戸や松浦、南島原に範囲は広げられないんでしょうか。補助金の関係かなにかあるんですかね。

(加藤生涯学習課長)

この辺りににつきましては、例えば平戸におきましても、離島部の学校もごぞいます。また長崎市、佐世保市においてもごぞいます。このことについては今後、検討を加えていきたいと思っております。

(中崎教育長)

他にございませんでしょうか。ぜひ、離島の子どもたちを育ていくようなメニューになるよう、より充実に努めて参りたいと思っております。

(中崎教育長)

それでは報告事項につきましては、これで終了いたします。  
次の議案審議からは非公開で行いますので、傍聴人及び報道関係者の方は退席をお願いいたします。  
しばらく休憩をいたします。

協議 (秘密会)  
議案 (秘密会)  
報告 (秘密会)

午後4時30分、本日の会議を終了